はじめに

東北歴史博物館は、宮城県を中心にしながら、東北地方の歴史・文化に関わる資料の収集と保存、研究に努めています。また、その成果を広く世界に発信することにより、社会との交流を促進し、国際化時代にふさわしい地域づくりと地域活性化に貢献することを使命としています。

本紀要は、そうした使命のもと、当館職員の地道な研究活動の一端を公にするものです。今回は博物館学から論文１編、考古学から論文２編、そして民俗学から報告１編、保存科学から報告２編、建築学から報告１編を収録しています。いずれの報告・論文も東日本大震災で罹災し、大きな被害を出した東北に立脚し、その復興の歩みの中で一人一人の学芸員が日々の実践の中で思索を重ね、東北の再構築へ向け、さらに次の世代へとその成果を手渡していく営みの記録ともなっています。

鷹野は博物館･博物館相当施設と博物館類似施設について、昭和26年に制定された「博物館法」が制定以来60年以上変わることがなく、法制定時の矛盾点も解消されないままになっていること、登録することのメリットとその法的整備の重要性について論じています。

古川は古代城柵官衙遺跡の外周施設の広がりから、防御施設としての城柵の役割を再評価し、列をなす土坑群を中国歴代王朝の「陥馬坑」相当施設として世界史の中に位置づける試みをしています。

相原は3.11東日本大震災で建て替えることとなった家に残されていた考古資料から、戦前・戦中・戦後まもなく活躍された故北村千代治氏の事跡をたどります。学習院大学客員研究員の大出尚子氏から北村の「満洲国」における動静に関し、玉稿を賜っています。

笠原は平成27年に佐藤吉夫氏から２日間にわたって聞いた堤人形・松川だるま製作について報告します。仙台市堤町が住宅地として大きく変貌する中で、60基以上の窯跡の所在を確認することができました。

及川・芳賀は津波被災資料の中には一部異臭を発するものがあり、臭気成分は非常に微量のためこれまで同定困難でしたが、今回同定でき、その結果を示すとともに、一部の文化財への影響の可能性について検討した結果を報告します。芳賀・及川は木質系材料で調質性にすぐれ、収蔵庫運営にあたり低コストで環境維持を行うことができる可能性を持っている複数の木質系収蔵庫の温湿度変動調査結果について考察を加えます。

西松は県内最古の西洋式木造建築の旧遠田郡役所庁舎について調査し、細部意匠が良好な状態で残っており、県内ひいては東北地方における洋風意匠の発展過程を解き明かす上で貴重な建造物であると位置づけています。

職員一同、今後とも新たな一歩を刻むよう一層の研鑽を重ねる所存ですので、変わらぬご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成29年３月27日

東北歴史博物館長　鷹　野　光　行